

山田みやこの活動報告

令和元年11月4日(月)

第6回生活困窮者自立支援全国大会 二日目

《第6分科会》

宮城の子ども・若者支援の今

～支援に繋がらない声なき声に繋がるための

宮城県の多様な取り組み～

・ NPO法人アスイク代表理事 大橋 雄介氏

困難を抱える子どもたちを社会で育み、地域で見守り見えにくい家庭に関わっていく。

活動としては学びサポート・子ども食堂・フリースクール・保育園。学びサポートとしての学習、生活支援事業は不登校・ひきこもりの子も参加。受験を控えている子、学習したくない子など多様なニーズを持つ子を一度に支援するため非常に大変。企業と連携しアルバイトとして加わってもらう。保護者の相談支援も行っている。義務教育終了後も継続する繋がりを持ち、子どもにとって唯一本音で話せる場所としている。しかし課題は山積している。性的虐待、いじめ、自殺念慮、高校中退など。

・ 文部科学省 初等中等教育局

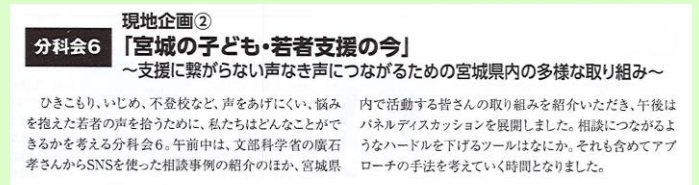
児童生徒課 廣石 孝氏

[SNSを活用した相談事業の実施状況]

相談のしやすさからか、電話相談の数倍のアクセス。会話の可視化、ログの活用による相談の円滑化、チームでの相談対応のため多様な相談に対応できる。一方で相談者の状況や真意の把握に時間がかかり、相談者の高いスキルが必要。複数の相談員の確保等の課題が残る。

[他機関との連携による対応]

匿名のSNS相談に対して、県教委・SSW・警察の連携でハイリスクの生徒を特定でき、支援を継続している。



・せんだい子ども食堂共同代表 門間 尚子氏

[つながる宮城のこども食堂]

中学生・高校生から

親が忙しいからいつも一人で食事

親に殴られても家を出ていく当てがない。誰にも話せない

勉強や部活をしたくても兄弟の面倒を見ないといけない

親からの性的虐待がおかしいと思わなかった、当たり前と思っていた自分か嫌い

母子家庭、母が死んだら自分はどうなるのか

このような声がある。そこで食を通じて子どもたちの命をまもり育て「こども食堂」を2016年4月より開始。

「おなかもこころもいっぱい！」子ども食堂は、子どもの居場所の一つ。子どもたちが多様な価値観に出会える、家庭や学校とは異なる経験ができる場所。子どもたちはたくさんの人との関わりの中で自尊感情を育む。生きるために必要な5つの力は、

“安心感・信頼関係・愛情・セルフコントロール・自尊感情”

子ども食堂の活動を続けるために「つながり」を大切に、そして「一人じゃないよ」と伝え続けている。

・認定NPO法人Switch 石巻統括マネージャー 田口 雄太氏

心に不調を抱えた若年者を中心に「働く」「学ぶ」「共生する」をテーマに活動している。

障がい者の就労移行支援・自立訓練・ユースサポートカレッジの就労準備・職場実習・高校連携事業を実施。その中でNOTE Café事業として、高校内にて居場所カフェを開設し、就職サポート・家庭内相談・中退予防を展開している。スタッフは精神保健福祉士、社会福祉士、ジョブコーチ、保育士、幼稚園教諭、一般職経験者+大学生ボランティア。

多くの生徒と出会うきっかけは就労課題や居場所がない等での本人や学校の困り感だが、その多くの背景には経済的困窮が含まれていることが多い。関わりの中で他機関への接続や連携を実施している。高校生のうちに繋がることで卒業後に支援が切れてしまうことを防げる。通常の学校による就職支援では難しい生徒は個別に関わることができ、経済的な自立の一助となる。

・NPO法人POSSE仙台支部代表 森 進生氏

大人食堂から見える働いているのに貧困な人の増加と無縁社会

～居場所としての「大人食堂」の可能性～

労働相談、労働法教育、調査活動、政策研究・提言を若者自身の手で行う。

労働者の人たちに無料で食事を提供する「大人食堂」を開催。更に労働・生活・住居の無料相談会を実施している。

中高年を中心には働いても貧困な労働者(ワーキングプア)問題がある。働いているのに貧困な状態に陥ることを問題化。大人の貧困を再可視化していく必要がある。

大人食堂をやってみた成果として、食事だけでもと立ち寄り「愚痴」レベルでも話せる場となった。また孤立状態から仲間と出会ったり、支援者と出会う中で新たにつながりが生まれる。ワーキングプア対策の政策を引き出す力にもなるため、多くの人に労働・貧困が社会的な問題であることを自覚させる契機になっている。

〈二日間の研究交流大会に参加して感じたこと〉

生活困窮者支援において縦割りを超えて、人として丸ごと受け入れ、断らない相談を目指し、努力を重ねてきたが本当に支援が必要な人に支援が届いているのかという問題が見えてきたため、今回「困難の折り重なり生きる人々に支援は届いているか?!」というテーマになったという。

しかし多面的な全国での支援は確実に成長していることを実感し、栃木県においてももっと多くの方が少しずつでもいいので支援・応援に関わるよう、実態の周知が必要だと思う。多くの先駆的支援を行う方々に敬意と感謝を表します。

※大会会場では台風19号で甚大な被害にあった宮城県丸森町への募金箱を設置し、善意の協力を致しました。